

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

釜ヶ崎のまち短期留学

貧困の連鎖を断つために ～釜ヶ崎のまちづくりに学ぶ～

釜ヶ崎で繰り広げられる反貧困のとりくみを一緒に学びましょう！

■日 時 2021年7月25日(日) 10時～16時ごろまで

■費 用 5000円(昼食代含む)

■定 員 10名(先着順)

■申込み お名前・ご住所・TEL・FAX・携帯番号を明記し、メール・ファックスでお申込み下さい。

主催・問い合わせ・申込み先◆ **総合社会福祉研究所**

〒543-0055 大阪市天王寺区悲田院町 8-12 TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

<http://www.sosyaken.jp>

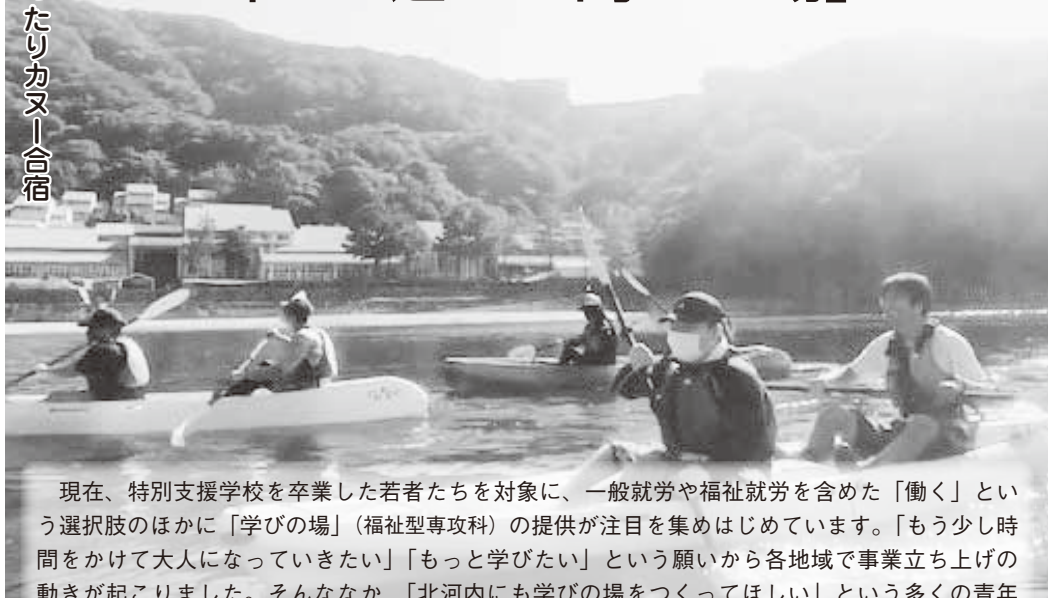
E-mail: mail@sosyaken.jp

花見で外出、
初集合！



カラフルキャンパスのなかまとともに ～2年めを迎えた「学びの場」～

ゆったりカヌー合宿



現在、特別支援学校を卒業した若者たちを対象に、一般就労や福祉就労を含めた「働く」という選択肢のほかに「学びの場」（福祉型専攻科）の提供が注目を集めはじめています。「もう少し時間をかけて大人になっていきたい」「もっと学びたい」という願いから各地域で事業立ち上げの動きが起きました。そんななか、「北河内にも学びの場をつくってほしい」という多くの青年たちや保護者の願いをうけ、昨年4月にカラフルキャンパス（社会福祉法人大阪福祉事業財団 自立訓練事業）が誕生しました。



和太鼓発表会のテーマは「みんなで炭治郎」



カラフルバンド発表会♪

カラフルキャンパスでは、ダンス、調理実習、社会見学、園芸、ミュージック、アート、将来の生活に必要な学習、自分でテーマを決めて追求する授業など、支援学校を卒業したあとの、いわば大学のような位置づけとして、日々の積み重ねを通して学びを得ていく授業をおこなっています。さらに特別な授業として、カヌー体験、釣り体験、和太鼓、書道、自分で服を購入して披露するファッションショーなど、趣向を凝らした学びを工夫しています。

調理室でおやつ作り



こころとからだの学習



スタートして1年がたちましたが、さまざまな課題もあります。ひとつは現行の制度では学びを保障するだけの十分な予算がないことです。これはとうぜん、人材確保にも影響してきます。2つめは期限の問題です。現在、「自立訓練」の制度は2年の年限での運営となっています。延長の動きはあるものの、制度としてはまだ確立しておらず、あいまいな状態です。3つめはカリキュラム時間以外の学生受け入れの問題です。学生が帰宅する時間にはまだ親が働いている家庭もあり、そこをカバーできる制度が十分ではありません。



書道で「秋」づくり



ペットボトルのフタアート

カラフルキャンパスは2年目を迎え、今年は2年生9名と1年生1名でスタートしましたが、定員は20名としており、運営の点で十分とは言えない状況です。早急に学生の確保に乗り出す必要がありますが、「学びの場」（福祉型専攻科）の認知も少しずつ広がってきており、支援学校からの学生紹介の問い合わせも増えてきています。あらためて、学生を受け入れ、成長の結果を残していくことが求められていると感じます。また、さまざまな事業所との横のつながりを通して、「学びの場」としてより授業の中身を充実させ、そのなかで学生が成長し、人生をゆたかに過ごしてもらえるように、がんばっていききたいと思います。（写真・カラフルキャンパス、文・為平隆治）

●特集● 利用者・家族と共感し、つながる“社会福祉”

生きていく力となる「保育」の大切さを感じて

宮崎 涼香・佐田 伯江 11

あい共連の活動に保護者として参加して

小俣 徹哉・小上 輝子・松浦 孝英 14

つながり、支え合いながら、主体的に生きることの大切さ 永里よしみ 18

ほんとうのノーマライゼーションを実現するために 橋本 哲夫 21

施設でみんなから愛されるしあわせ 芝 亮子 24

「ホームケア」で専門性と安心を感じて 原田 眞美 27

●サブ特集●

【座談会】なぜ福祉に人が来ないのか 専門性と評価・待遇から考える

堤 昭子／清水俊朗／垣内国光 司会・石倉康次 30

●トピックス●

【PHOTO】ズームイン！

社会福祉法人かがやき神戸 なでしこの里 40

東日本大震災から10年、私たちはなにを学んだのか 丹波 史紀 42

●連載●

WORK WORK——わくワク——

本生そば～「信州のうまいものづくり」を合言葉に10年！～

信州そば工房さすな 48

検証！ 介護保険20年

第9回 養護老人ホームからみる介護保険 中野いずみ・藤岡理恵 50

かさねあい、はぐくみあう保育実践

二巡目のテーマは「求められる保育と私たちの実践」上西 克明 54

JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合 58

要求実現をめざし、全国アクションを力に政治の流れを変える

私の履歴書 社会福祉経営全国会議

どの子どもがしあわせになれる福祉をねがって 徳永 満理 60

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（23） 水野阿修羅 62

相談室の窓から

あらためて定義された「社会的コミュニケーション症」 青木 道忠 64

育つ風景 ザリガニに聞かせる子守唄 清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

「なかまの里をつくる会」会長として（5） 清田 廣 68

映画案内 『茜色に焼かれる』

吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

生田 武志 72

金光敏著『大阪ミナミの子どもたち』（彩流社）

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

元気ですか——!! ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば

ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ

川口モトコ 77

みんなのポスト 46／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● カラフルキャンパスのなかまとともに

～2年めを迎えた「学びの場」～

福祉のひろば

2021年6月号

●表紙の絵●
神門やす子

選り分けしない支援が「原点」

社会福祉法人大阪福祉事業財団 理事長 茨木 範宏

毎年、春とともに舞い降りる新しい風に心が浮き立ちます。大阪福祉事業財団は四月から六三名の新任職員を迎えました。辞令交付にあたり、お伝えしたことがあります。それは、あなたの仕事の「原点」を大切にしてほしいということです。

私は三八年前に財団に入職し、救護施設「高槻温心寮」で働いてきました。そこは精神障害をはじめ、さまざまに困難を抱える方々が暮らす生活保護施設で、貧困と正面から向かい合うところでした。私自身もたくさんのかつての自分を学び経験し、泣き笑いの日々を過ごしました。

あるとき、入所してすぐの男性が、知らぬ間にしかけたきり帰ってきません。警察に保護願いを出し近辺を捜すものの暗くなっても見つからず、不安な気持ちで最悪時も想定しながらの搜索でした。夜になり大阪市内で保護され、ひと安心し迎えに行きました。踏切を越え線路に入ろうとした彼を、通りがかりの方が飛びついて止めたということでした。帰りの車内で話を聞くと「施設は個室でベッド、食事もちろんと三度用意され、自分みたくに障害をもつてなにもできない者が、こんないいところで世話になつて生きていてもいいのかと思った」と。

またあるとき、何度か行先不明の外出をつづけていた半身まひの高齢男性が、佐賀県伊万里市で保護されたと連絡がきました。あまりの遠方におどろきながら、すぐに連れ帰る思いで迎えに行き、話を聞きました。「若いころに佐賀県内の炭鉱で働き、どうしてもそこに行きたかった」と。方針変更し、タクシーでその炭鉱に向かいました。すで



いばらき のりひろ

生活保護施設の支援員を経て2017年から（社福）大阪福祉事業財団理事長。2011年から「社会福祉施設経営者同友会」会長を務め、2020年4月に社会福祉法人の新たな全国組織「社会福祉経営全国会議」会長に就任。

に炭鉱は閉山、しかし炭鉱住宅の跡はそのままでした。長屋や銭湯、映画館らしき建物がならぶ町の痕跡。じっと目をほそめてながめる彼の脳裏に浮かぶものはなんだったのか、青春時代に仲間と過ごした日々や淡い恋もあったかもしれませぬ。運転手さんは私を息子と勘ちがいで「親孝行ですねえ」と何度もくり返し、近くの温泉旅館まで手配してくれました。もちろん旅館でも孝行息子あつかいで、本当の父子旅のようでした。その後、彼はふらつといなくなることもなく、最後は施設で永眠されました。

利用者さんのゆたかな暮らしをつくりたいという私たちの思い。一方で、「自分みたいな者が生きていいのか」と自らを責める方、どうしても行きたい場所がある方……施設で暮らす方々は、仕事や家族、尊厳や権利などの喪失感のなかで暮らしてきた人たちでもありました。

仕事にたずさわるなかで考えたのは、障害があるからとか病気だからとか、実は分け隔てをしていたのは自分のほうではなかったのか、ということ。目の前の援助を必要としている方に、手を差し伸べる、一緒に歩く、少し背中を押す、それをこの人はいけど、この人は……と考えていないか、本当に困っている人ほど、助けを待ちながら発信できていないのではないか、そう考えるようになりました。選り分けしない支援が私の「原点」でした。

いかに制度が変わろうとも「権利としての福祉」という軸をブレずに求めるように、それぞれが自分の原点を見つけ仕事のなかで大切にすること。そんな無数の思いが、福祉のこれからを築いていくのだと感じています。

利用者・家族と共感し、つながる社会福祉

社会福祉の市場化がすすみ、福祉サービスを「提供する・される」という関係性が広がるなかで、社会福祉の利用者や家族と福祉労働者との共同がむずかしくなっています。社会福祉を利用する側も、「お金を払っているのだから」と一方的な要求やクレームのような言い方になってしまったり、働く側も、日々仕事に追われ家族とコミュニケーションをとる余裕もないなかで、とくに若い職員さんのなかには家族対応に不安を感じている方も少なくないと思います。

福祉の仕事に「正解」はありません。子どもや障害のある人、高齢者を真ん中に、家族と福祉労働者が情報や悩みを共有し、それぞれの役割を担いながら、みんながしあわせになれるためにが最適を考え、一緒に模索し、生活を築いていくのが社会福祉です。そうした過程があるからこそ、家族とよろこびを共感し合い、「ああ、これでよかったんだ」と実践に自信をもてたり、当事者や家族の反応がまた、福祉の仕事の大きなやりがいになるのだと思います。

私自身、子どもを保育園にあずけるようになって、保育園の先生方には、本当に感謝しかありません。子どもは、保育園に通うことで、家にいるよりずっとゆたかな経験をし、家族以外のたくさんの人からの愛情を受け、すくすくと育ってくれています。

感謝の思いをできるだけ伝えるようにしていますが、送迎の時間は親も子どももバタバタです。先生は子どものようすをたくさん伝えてくれますが、親から話しかけるのはちょっと遠慮してしまいます。とくに昨年度は新型コロナウイルスの影響で、親が保育園と関われるさまざまな行事が中止になってしまいました。

そうしたなか、新年度がはじまり、昨年度は中止になった保護者懇親会が開催されました。いつもの軽食は持ち帰り、広い部屋で消毒と換気をしながらおこなわれました。冒頭で先生が「昨年度は保護者のみなさんとの懇親会ができないまま一年がすぎて、やっぱりこの懇親会は大切だとあらためて感じました。むずかしいこともたくさんありますが、感染対策をしっかりとしながら、できることを考えて工夫しながらやっていきたいと思っています。保護者のみなさまにもご協力をお願いできればうれしいです」と話されました。この先生のことを聞いて、あらためて、ただ子どもをあずけるのではなくて、園と親と一緒に子どもを育てていく大切さを感じました。

国は福祉の仕事はだれにでもできる仕事だと言い、正規職員は一部だけで、現場の実践は非正規職員でまわせば十分だという方針です。生産性と効率性を重視し、子ども、障害のある人、高齢者を前に発揮されるゆたかな専門性をないがしろにしています。

しかし、福祉を利用する側はどうでしょうか。自分の子どもや家族のいのちをあずけるときに、その実践の中身や専門性の高さを気にしない人はいるでしょうか。現場のスタッフはパートやアルバイトの非正規職員で十分だと思っている人はいるでしょうか。多くの当事者や家族は、高い専門性とゆたかな実践をもって、子どもや家族をみてほしいと望んでいるはずです。ただ、お互いに考えている「専門性」や「実践」の中身を一致していく必要があり、そのためには、やはり家族とのコミュニケーションが不可欠なのだと感じます。

福祉を利用するなかでその専門性と大切さを感じ、理解し、福祉現場や福祉労働者を応援している家族がたくさんいることが伝わればと思います、今号の特集を企画しました。利用者・家族・福祉労働者を分断しようとする制度・政策に対抗し、あらためて共同をひろげていくヒントになればと願っています。

(編集主任)